あの日から、未来へ

人が、街が失われた2011年３月11日の"あの日"。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

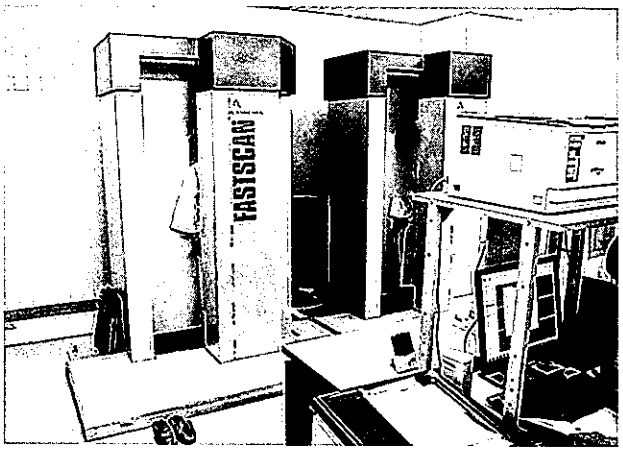
南相馬市立総合病院
内科医
坪倉正治氏

根拠のない風説がまかり通る現実

とあるマンガでの鼻血に関する描写が話題になった。福島県で放射線障害によって多くの人が鼻血を出して困っているというものだ。いうまでもないが、現地で診療していてそのような状況では全くない。多くの現地の医師はあまりにも的外れで話題にもしないか、一笑に付す程度の内容である。

もちろん放射線障害による鼻血は、出血傾向に伴う鼻出血である。数時間で致命傷になる可能性もあるものであり、急性放射線障害を引き起こすような数百ミリシーベルトとかその程度に被曝しないと起こり得ない。出血傾向は鼻だけにとどまらず、他の多くの部位からの出血も伴う。

相馬市や南相馬市の空間線量は町中であれば東日本と大差ないレベルとなり、ガラスバッジを装着し他県に行った人が示す値が高くなる例も見られる。内部被曝を見ても流通食品からの追加被曝は年間0.01ミリシーベルト以下に抑えられている住民が95%は超えている状況である。現在の放射線量は地域によるバックグランド放射線量の差の中に埋もれる程度の値となってきており、急性放射線障害の議論をするまでもなく、逆に放射線に関係するような何かの事象が疫学的に発見されたとしても、それが現在の放射線による影響だと述べるのは全く容易ではない状況になってきている。



南相馬市立総合病院では、今日も学校検診として内部被曝検査が行われている

「鼻血」というセンセーショナルだが、「放射線の影響は被曝した量の問題」という前提が失われたまま、科学的ではない風説がまかり通る状況である。現地で働く医師の１人として、３年経った今も県外に住むそれなりに多数の人たちの、福島県に対する印象が今回のような状況であること対して「落胆していない」といえば嘘になる。

ワクチンを打つべきかどうか、健康診断は何を受けるか、どのような治療法を行うか、どこか似たような問題を抱えている。結局は教育や基本的な知識の問題になるのだろうか。誰かがやらねばならないのだろうし、それは知識を得るためだけではなく、現地にいる多くの子どもたちが自信を持って生活していくため、尊厳を守るためにも必要だと思う。自分で自分のことをしっかり主張できるような子どもばかりではない。科学的どうこうの議論などより、子どもたちが自分のことを話すきっかけを狭めたり、自分自身のルーツを語れなくなったりすることのほうが、いろいろと風説、喧伝される健康被害などよりよほど重要だろうと感じている。時間もかかるのだろうし、日本全国で知識を持ってほしいと思うのはあまりにも楽観的な希望だろうか。そんなことを思いながら、またいつもの外来に戻った。被曝検査は今日も淡々と続いている。